「竹馬の友」物語

物語「竹　馬　の　友」

はじめに

古民家に保存されている犬養木堂毅ゆかりの掛け軸、額、屏風、写真や手紙あるいは古書籍などを参考に高木家の歴史を物語風に振り返ってみる。

高木家は、地区では、「大元家」と呼ばれている古い家である。

家系図によると人皇第百九代明正天皇の寛永八年に、高木家初代の高木助左衛門が生まれたとある。以後、第二代目が、佐助と続き、江戸の後期に第八代目の高木友右衛門、九代目の鹿右衛門、明治期には、十代目の友衛、十一代目の浅次郎、そして、昭和期に入り十二代目明夫と続く。

九代目の鹿右衛門が、第二十九代内閣総理大臣犬養木堂毅と竹馬の友である。

一庶民としての高木家の人々が、激動の歴史の中で生きた証としての種々の物品のなかに、将来に繋がる知恵が含まれている気がする。

特に、鹿右衛門と犬養木堂毅との付き合いの一端が、これらの品々の中に垣間見える。

明治維新から、明治期、大正期そして昭和初期のめまぐるしく変化する時代において、現在残っている古書籍を読み返してみると参考となる点が多くある。

まず、家系図から、高木家の歴史を調べてみた。

ついで、犬養木堂毅の掛け軸、額、屏風、写真や手紙と高木家との関連について想像してみた。

そして、古書籍については、木堂の経済学の翻訳本や「富の帝国」なども、なぜ高木家に残っているのか興味しんしんである。

詳細な家系図

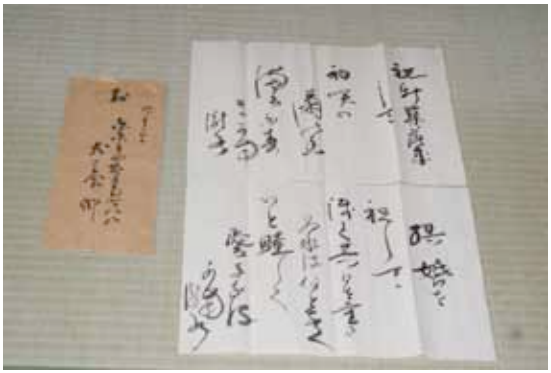
清和源氏から歴史を記述している。

家紋

高木家の家紋は、丸に違い鷹の羽である。
手提げ提灯などが残っている。

書

友衛の娘（鹿右衛門の孫）愛子の結婚のお祝いと家の新築記念のため木堂から送られた書が残っている。



掛け軸

床の間に掛かっている書の掛け軸には、「高木鹿右衛門は、吾の竹馬の友也　犬養毅　落款」とあり、年号は、戊申であるので、明治３８年（１９０８年）に書かれたものである。

額

「恢弘祖業　高木氏新築記念　犬養毅　落款」

文言は、以下のような文書の中に見える。

政始ノ詔(明治2年正月4日)の

祖業ヲ恢弘シ中外ニ被ラシメ永ク　先皇ノ威徳ヲ宣揚センコトヲ庶幾ス汝百官将士勉励不懈各其職ヲ竭シ敢テ忌憚ナク朕カ闕漏ヲ匡救セヨ汝百官将士其勉旃

資治通鑑巻第七十

魏紀二

世祖文皇帝下

黄初四年（癸卯、二二三）

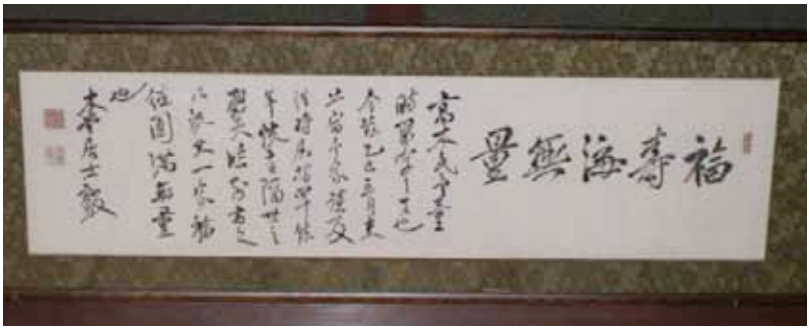
の中にも恢弘祖業の文句が見える。

額

「福寿海無量」木堂居士毅

客間に架けている書の額には、「高木氏は、吾の習字の友也　犬養毅　落款」とあり、年号は、乙巳　であり、明治３５年（１９０３年）に書かれている。

『観音経』の中に「福寿海無量」の一句がある。これは観世音菩薩の功徳は「福を聚めた大きな海のように量に限りが無い」という意味である。



額

「頌南山　寿老会記念　木堂　毅」

「南山（ナンザン）の寿（ジュ）」

―小雅・天保―

人の長寿を祝う言葉。南山のように永久に変わらないということ。

【南山（なんざん）】

中国、西安の近郊にある終南山（しゅうなんざん）の異名。

屏風

本来は、一曲二双の屏風

七言絶句

以下に、現代語訳を示す。

花裏楼○春到早

竹間○戸自來遅

花のなかにある楼台には春が来るのが早く

竹林にある煙出しのある家にはおのずから遅い

両岸楊花風作雪

一池荷葉雨成珠

川の両岸にある楊の花の綿は風によって雪をなし

池の蓮の葉には雨が珠をなしている

屏風

古い屏風には、「森田月瀬」の名前が見える。森田月瀬は、庭瀬藩の藩医であったが、漢学の造詣が深く、先祖の高木鹿右衛門も森田月瀬に学んだと想像される。

手紙

鹿右衛門に送られた木堂が政界を引退する旨を書いた書も残っている。

新井白石の「折たく柴の記」や頼山陽の「日本外史」などの和本も残っている。

木堂は、明治維新後の西南戦争では、郵便報知新聞の従軍記者として有名となった。西南戦争後、東海経済新報という三菱財閥系の新聞社で仕事をしたこともある。

木堂は、明倫館における英語の「万国公法」の輪講により、英語の必要性を感じ、東京の共慣義塾や慶応義塾で学んでいる。

木堂は、アメリカ学派の「圭氏経済論」を翻訳している。木堂は、保護貿易論であった。他方、東京経済雑誌の田口卯吉は、イギリス学派であり、自由貿易論であった。大島貞益はドイツ学派であった。ちなみに、達磨蔵相高橋是清は、米国にて実地で英語を取得している。

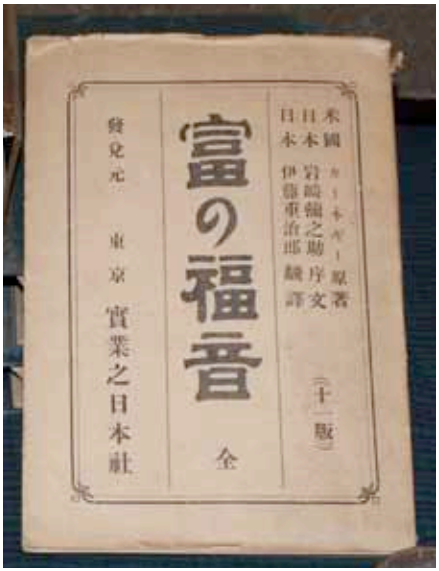
犬養 毅訳『圭氏経済学』、1884 (Carey, Henry Charles: Principles of Social Science, 1858-59)

戦後の日本の経済は、米国に大きく依存している。リーマンショックは、つい昨年のことである。

古書籍の中に、世界一の大富豪であるマイクロソフト社の創業者であるビルゲイツの愛読書と言われているアンドリュー・カーネギー著の「富の福音」の明治期の翻訳本があった。序文は、三菱財閥の創業者である弥太郎の弟の弥乃助である。また、アンドリュー・カーネギー著の「実業の帝国」の翻訳本も保存されている。序文は、渋沢栄一である。我が家にこのような古書籍が、残っている理由の一つに、先祖の鹿右衛門が、木堂の竹馬の友であることに加え、木堂に大いに魅力を感じ、影響を受けているものと考えている。

これらの古書籍を改めて読み返してみると現在の経済状況の打破にも通用することが記述されていることに驚きを感じる。

富の福音



『富の福音』は、ビジネスの競争が「適者生存」に終わるという前提に基づいている。適者とは、「大企業を運営していく優れた才能」に最も恵まれている人のことだ。ビジネスで成功し莫大な資産を手に入れる人は、世の中の真の動きを的確に見極め、資産をどこに振り向ければ良いかをうまく判断する才能があると、カーネギーは論じている。つまり、成功者は能力がまだ残っているうちにビジネス界から引退し、資産を慈善事業に使うことに残りの人生を費やすべきだという。

実業の帝国

米国の鉄鋼王と言われたカーネギーの「実業の帝国」の翻訳本である。序文は、明治期最大の実業家とされた渋沢栄一の序文がある。

「実業」という言葉は江戸時代まではジツゴウと読み、「善悪の行為」を意味する仏教語であった。

まちかど博物館

平成 21 年 11 月 8 日

㈱横山工房